

# 愛しいひとたち、声に出して読みたい物語

小窪瑞穂 — ライター

『ムーンライト・シャドウ』 吉本ばなな/角川文庫/1998年



20数年前の記憶をたどると、「ムーンライト・シャドウ」はわたしにとって、切なくて不思議で感動的なお話だった。当時のわたしには体験したことのない気持ちや状況が書かれていたけれど、想像で追体験し、すっかり感じ入った。今回読み返したとき、わたしは気がついたら朗読していた。なんとなく声に出して読みはじめたら止まらなくなって、最後まで朗読したのだ。はっとなった表現を書き留める、ということはよくするし、この作品にもそんな箇所は本当にたくさんあるのだが、たぶん、声に出して最後まで朗読した小説ははじめてだと思う。

最初に読んでからずいぶん時間がたち、大切な存在をなくしたことがある今のわたしには、わかりすぎる気持ちや状況ばかりになっていて、読みながら胸が詰まった。そして、子どもの頃不思議だと感じたところは、まったく不思議ではなくなっていた。不思議どころか、普通のこととしてすっと入ってきた。うららのような人に会うこともあるし、なくなった魂に会えることもある。さつきが毎朝走ることも、柊がセーラー服を着ることも、わかりすぎた。わたしたちの人生にはときおり、きちんと生活をしようしたり、日々の雑事を大切にしようしたりすることでしか、やり過ごせない時間が襲ってくる。自分の気持ちをしゃんとさせるために、なんとかバランスを保つために、何かを、それが他人にとってはかなり可笑しいことであっても、自分に課さなければならないことがある。

ばなな作品に登場する人物たち、彼らの行動や言葉たちは、いつも魅力的だ。読んでいて何度もくすくすしてしまうし、この人はなんて愛らしいんだ、と思う。登場人物に対して愛しい気持ちをもちつつ、自分も物語の中において、物語を読んでいる、というよりは、彼らのいる世界と一緒に眺めているような感覚になる。そして、読み終える頃には、なんだか名残惜しく、そこから離れたくないような、切ない気持ちになる。それは、夢のなかでそれが夢だとわかっている、目を覚ましたくない、覚ますまいと思うことに似ている。

わたしは、十代の頃に彼女の本を読んで、ものごとの事情やひとの気持ちを押し量るセンスを身につけたような気がする。ものごとやひとの、どんなところを見て、どういうところに心を動かすべきか、誰に教わったのかといたら、自分が読んできた物語のなかのひとたちだと思う。

さつきはどんな大人になったのだろう。あるいは、柊は。物語が、永遠に続いていたら。この物語にふたたび出会い、自分のなかに流れた時間を知り、自分を知った。再読の喜びも知った。あの頃のわたしといまのわたしの間に横たわる貴い物語。たくさんの方に、このような物語が存在することを心から願う。🍵